

い。

批判はともあれ、マラヤ研究のための大きな業績であることに間違いがない。(本岡武)

Gullick, J. M.: Malaya. Frederick A. Praeger Pub., N.Y.. 1963. pp. 256

本書は Nations of the Modern World 叢書の一冊として出版されたものである。著者ガーリック氏は英国の人、Taunton School 及びケンブリジで教育を受け、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスのレイモンド・フェース及びモーリス・フリードマンなどマラヤに詳しい人類学者の指導も受けている。まず植民地官吏となり、次で今次大戦中軍籍に入ったが、1946 Malayan Civil Service に加って11年間マラヤにあり、マラヤ共産党対策、貿易、農村振興等々に従事した。1957-62 ロンドンでマラヤにゴムのエステイトを持つ人々の Guthrie Group の所長をつとめた。従って純粹の学究活動のみをしているのではないが、Journal of the Royal Asiatic Society 等にも幾篇かの論文を発表している。しかし何よりも注目すべきガーリック氏の論文は Indigeneous Political Systems of Western Malaya, 1958 であって、ロンドン大学経済学部の社会人類学叢書の (Monograph on Social Anthropology) 一冊として出版されている。西部マラヤの村落構造から支配階級、サルタン等に至るまで、その政治的社会的構造を明らかにしたもので、ガーリック氏の学名を決定したものと言うことができ、マラヤの社会構造の研究者にとって不可欠の文献と認められている。

マラヤは周知のようにマライ人、中国人、インド人からなる複数社会であり、殊に20世紀に入ってから人口的にも経済的にも著しい発展をとげた。その原因は主としてゴム栽培の導入、錫鉱の開発及び国際貿易港としてのシンガポールの機能によっている。こういう複数的な社会をかかえながら、戦後には独立を獲得し、更には北ボルネオ、サラワクを含めてマライシア連邦へと発展し、経済的にも安定した国民として形成されて行く姿は東南アジアの国としては驚くべき現象であると言える。ガーリック氏は本書でこの過程に対して統一的な説明を与えようとしているのであって、氏が直接政治や経済にたずさわっていた人であるだけにその説くところにあおなげがない。

本書の半ばを占めるのはマラヤの歴史であって、

1400から1511までのマラッカ王国の歴史にはじまって、現代に及び、これに11章をついやしている。以後の諸章は政治、経済、農村振興、教育、新指導者などを取扱っているが、新聞記事、各種のリポート類がよく利用されている。

本号に紹介されているシンガポール大学の Ooi Jin-Bee の著書がより多く地理的であるに対して、本書はより歴史的、文化的であるが、共にマラヤの現状を理解するために不可欠の文献と思われる。但し1958の「西部マラヤの土着政治組織」の方が学問的香気に於ては遙かに高いように思われる。(棚瀬襄爾)

Newell, William H.: Treacherous River, A Study of Rural Chinese in North Malaya. Univ. of Malaya Press. 1962. pp. xxv + 233

Treacherous River とはマラヤの Province Wellesley の中央部にある川で現在 Sungei Pertama として知られている。本書はその川に沿う潮僑コミュニティの調査報告である。しかし単なるモノグラフではなく、彼らの出身地である広東省の北東部における中国村落やマラヤの他の華僑社会(とくにシンガポールの都市住民や広東人のコミュニティ)との比較を行なって、この報告をより価値あらしめるものとしている。内容は、家族構造、宗教、結社、共同労働、紛争等、極めて社会学的な問題に重点が置かれている。

(1) 調査地が潮僑のコミュニティであること。これは、村人の(少くとも古い世代の)関心が常に中国に向っていることを意味し、又、マラヤにおける華僑一般の農村生活の典型とはなりえないことも示す(方言・出身地・環境・政府の干渉の度合・住民の伝統的価値への志向度などによって同じ中国人コミュニティでも種々のバラエティが生じる)。(2) 一方の方言が他方に通じないということはあっても、中国人社会の一部であるという意識は強い。隣接のマレー人との社会的経済的な接触は殆んどなく、生活様式・宗教などもマレー人から影響を受けることは殆んどない。

(3) 中国に於けると同程度の強固な同族結合や、(経済的単位としての)世帯と村とが密接に結びつくというようなことが予想されるが、実際には、この基本的な結合関係が欠如している(この村の潮僑は、専ら野菜作りを主とし、養豚・養鶏をもして生活している。労働

には四季の別がなく、四季のはっきりとした水田地帯のような共同労働の組織は必要がない。

(4)この新しい生活環境に対応して、同族・村結合の代わりに、「感情」(友達であること、友情)を契機とするインフォーマルな集団が形成されてくる。(5)更に伝統的価値体系を本土から持ってきた世代と、次のマラヤに生れ育った世代のものが交代しつつある。この交代を知る規準として、(a)世帯が核家族より大きくないこと、(b)父子間の葛藤が増して両者別々の核家族を作ることの二つが上げられる。(6)結局、彼らは「外見上は中国の伝統的な価値(体系)を保持しているように見えながら、実際は新しい型の社会を作っている」のである。

著者 Newell はイギリス流の社会人類学者で、このモノグラフは1954-5年の約10カ月間の参与調査によるものである。(1948年には四川省の成都付近の村をも調査している。)マラヤの華僑農民の社会構造を取り扱ったのは彼が最初であろう。彼自身本書を preliminary survey としているので今後更に研究を進めるのであろうが、欲をいえば全体社会的なパースペクティブをとり入れてほしかった。(前田成文)

Insor, D.: Thailand, A Political, Social and Economic Analysis. George Allen & Unwin Ltd., London. 1963. pp. 188

ドン・ムアン飛行場の説明から叙述が始まる点やあまり聞き慣れない著者の名前などからして、一見本書は、好事家のものした、いい加減な本のような印象を与えかねないが、しかし、実は、一般の本ではないまでも、それほどふざけた本ではない。

著者のタイへの関心は、広汎に及び政治経済の基本的特徴から、はては、大学教授の給料にまで及んでいる。しかし、本書の眼目は、サリットの施政のなかに、タイの将来の政治経済の動向を決める要因を求めるところにあるようだ。

タイ国の政治については、70頁余りが割かれている。タイ政治を常識的に人物中心の政治と考え、30年代から今に至る著名政治家の解説がなされているが、タイ政治の有機的な構造把握が平板で、ひどく食い足りない。ただ、われわれの知ることの少ない58年以降のタイ政治の実態に、かなり筆が及んでいて、少くともその個所は新鮮な思ひで読むことができる。経済に

関しては32頁が割かれているが、サリットの経済開発六カ年計画が焦点となっており、興味深く読める。サリット政権がタイ経済近代化の阻害要因をどう捉えているかを示す Kurit Punakan の11ヶ条 (pp. 156~7) など面白いデータだ。全体としてサリットの政策に好意的で、将来に期待を抱かせる書きかたをしている。

全般的に、著者のタイにたいする評価は、厳しいようで甘い。官僚層の腐敗の原因を「低い給料と遅い昇進」に求めている点など、同情的な判断だ。そして、将来の政治のあり方を国際政治の動向と結びつけて考えている点なども、リアルな判断だが、タイの政治家にたいしてかなりスポイリングな考え方だ。しかし、評価といえるものがあるだけかもしれません。著者の評価の拠り所は、各章に点在する「アジア民主主義の諸問題」などの一般論めいた議論にあるらしい。しかし、そこに示される基本的問題意識が、余りに常識的でとってつけた感じなのは気になる。また、その問題意識が、著者の思考過程で、タイの現実にごう照射されたのかも不明瞭である。そういった点では、著者がアカデミックでないことが災いしている感じだ。しかし、その反面、アカデミックな処理を受けていないため、かえって、本書が、新鮮な魅力を備えるようになったふしもある。沢山のデータが、充分加工されぬまま盛り込まれたからだ。もっとも、そのデータは、もっぱら英文の二次資料から採られている。その点、本書は、絶対的魅力を欠く。ただ、タイの政治経済の最近の動向がかなりよく描かれている点で、本書は、ほかに知的好奇心を満たすよすがをもたぬ読者の欲求不満をば、かなりの度合、みたしてくれることだろう。その点を買うことにしたいと思う。(矢野暢)

Pendleton, Robert L.: Thailand. Duell, Sloan and Pearce, New York. 1962. pp. xvi + 321.

著書 Pendleton は1917~35の間にインド、フィリピン、シナでそれぞれ長期間、熱帯の土壌および農業の研究、指導にあたった後、タイ国にすみつき、1957年に死去するまでほとんどその全部をタイ国での研究、指導に過したという。本書は Pendleton の熱帯におけるこのような豊富な経験と数多くの研究業績を中心として R.C. Kingsbury その他の人々が補足、